

おもち食べて復興の力に

東北へ贈る米を刈り取り

豊橋大崎小
5、6年生

僕らが育てたもち米のおもちを食べて一日も早い復興を。豊橋市立大崎小学校(兼子知子校長)の5・6年生の児童約70人が18日、東日本大震災の被災地へ贈るもち米の刈り取りを学校近くの田んぼで行った。

この日は、地元の老人クラブやPTAと協力し

6年小林和さん(11)

30年以上続く同校伝統の米作りの一環。震災後、地元企業の支社がある気仙沼市へ正月のもちつきで使ってもらおうと収穫したもち米の一部を贈っている。



たわわに実った稲穂を収穫する児童ら＝豊橋市大崎町で

えを実施。今年は稲の生育がよく1週間早い収穫となった。

「被災者の人たちにおいしく食べてほしいという願いを込めて稲を刈りました」と話していた。収穫したもち米は、地元農家の人たちが脱穀、精米。このうち約20キを11月に気仙沼市前浜地区へ贈るほか、大崎フエスティバルの餅つき大会でも振舞われる。

(飯塚雪)

マツの木に菰を巻いていく児童ら
＝田原市立泉小学校のグラウンドで



早くも冬支度 マツの菰巻き

学校の象徴、3年生が作業

田原の泉小

田原市立泉小学校の3年生児童20人が18日、学校敷地内で冬の時期にマツの木を害虫から守る菰(こも)巻き作業を体験

した。同校にはマツの木が校庭をはじめ、グラウンド周辺など敷地を囲うように立ち並んでおり、学校の象徴的存在にもなっている。

この日はPTAに手伝ってもらいながら、3人1組で手分けして作業し、約100本のマツの幹に菰を巻いた。幹の太さは平均40～60センチ前後ほどで、児童らは菰を巻きつけながら、藁のひもを使って結んでいった。

東さんち 鶏飼ひ子 4365

